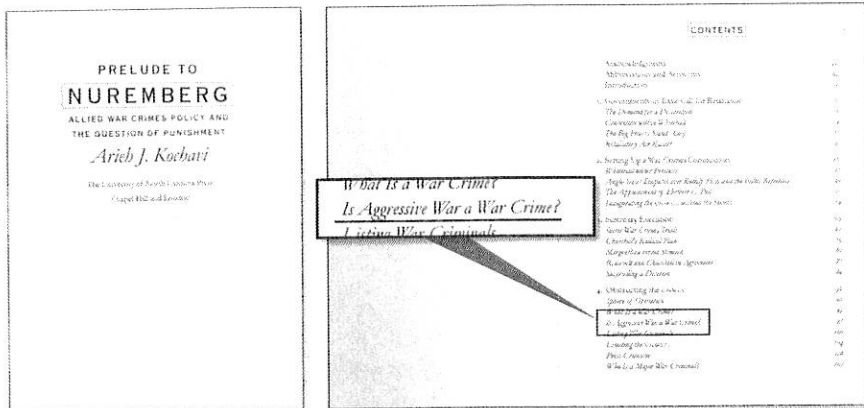




『Prelude to Nuremberg』の扉

同誌の目次。囲み部分に『Is Aggressive War a War Crime?』のタイトル

新しいステージに入った「日中戦争論」

中国人はなぜ平気で ウソをつくのか

キーワード「避諱」のナゾに迫る

北村 稔

立命館大学文学部教授

林 思雲

工学博士

1 侵略戦争は犯罪ではなかった

北村 稔

東京裁判と並行して行われた南京裁判が、どのようにして開かれるに至ったか、その経緯を調べていた私は、その首席裁判官であった石美瑜

——例の「百人斬り」の汚名を着せられた陸軍将校に死刑を宣告した人物である——の回想録を引用しようとして、そこに記された日付などに少々

不安があったため、さらに裏付けをとるべく図書館で文献を探していた。そしてたまたま手に取ったのが、国際法学者アリエフ・コチャービの『Prelude to Nuremberg』（ニュルンベルクへの序曲）という本だった。

（コチャービ氏はイスラエル人だが、本は英語で書かれている。日本語訳は出てお

らず、なぜか日本では故意に無視されていると思われることもあり、その翻訳が待たれるところである）

そのなかの項目の一つに、「侵略戦争（aggressive war）は犯罪（crime）なのか？」と記されていた。もともと私の目的は南京裁判に至る経緯の確認だけだったにもかかわらず、この言葉に強い興味を引かれ、コチャービ氏の本を熟読することになった。

ルーズベルトの格言

そもそも、「侵略戦争」と訳される英語「aggressive war」の「aggressive」という言葉には、「侵略は悪である」という倫理的な判断を示す意味はない。「攻撃的」「先に手を出す」「先制攻撃を仕掛ける」の意のほうが一般的である。

たまたま訪れたニューヨークのアメリカ自然史博物館で、私は玄関ホー

ルの壁面に刻まれたアメリカ第二十六代大統領セオドア・ルーズベルト（二八五八—一九一九）の格言を目にした。そこには「AGGRESSIVE FIGHTING FOR THE RIGHT IS THE NOBLEST SPORT THE WORLD AFFORDS」（権利のために進んで戦いを挑むことは、世界中の人々が行なうことのできる最も崇高なスポーツである）という一節があった。この国家（STATE）の行う「AGGRESSIVE FIGHTING」は「aggressive war」と同義語で、ここではむしろ、英雄的な行為として称えられている。このことからしても、「aggressive war」に「侵略戦争」という道義的意味合いをとまなう訳語をあてはめるのは不適切と言わざるを得ない。むしろどちらが仕掛けたかという戦争の開始状況を表す言葉と言ったほうがいいだろう。そもそも、ルーズベルトの言葉が刻まれた当時、

国家の行なう戦争は国際法上で外交の最後の手段として認められており、戦争自体に善か悪かの倫理判断を下すことはなかったのである。

では、なぜ先制攻撃を仕掛けたことが侵略戦争という犯罪と見なされるようになったのか。以下、『ニュルンベルクへの序曲』に依拠しながら話を進めたい。

第二次大戦のさなか、「ナチスによるユダヤ人の大量殺戮が行なわれている」と「世界ユダヤ会議」がアメリカやイギリスの当局者に訴えたが、アメリカやイギリスは「それは戦争とは直接に関係のない政治的な問題だ」と取り合わなかった。「ドイツ人がユダヤ系ドイツ人を殺戮したとしても、それは国内問題だろう」というわけである。戦争犯罪を立証するのは大変だから、そんな面倒なことはやりたくないというのが本音だったかもしれない。

れない。

ナチス・ドイツのとばっちり

同時に、ドイツに占領され、ひどい目にあっていったチェコやポーランドがナチスの侵略を告発し、チェコ亡命政権の法律顧問であったボフスラフ・エチエルを中心に、その犯罪性の立証に懸命になっていた。侵略戦争は戦争犯罪だという主張が賛同を得られないとみるや、エチエルは「ヒトラーたちは（侵略戦争以外の）死刑判決に十分な他の犯罪を犯しており、この見解が採用されれば、枢軸側の犯罪的政策全般の遂行手段となったすべての事例を正しく解決する方法を得る上で有益である」と主張した。そして、「侵略戦争一般が犯罪か否かを判断するのではなく、第二次世界大戦が犯罪なのか否かを決めよう」と食いついた。

これに対し、イギリス人の国際法学者アーノルド・マクネアーは、連合国戦争犯罪委員会（一九四三年、ロンドンに設置）の指導的立場にあり、戦後はハーグ国際司法裁判所の判事を務めた人物だが、マクネアーは、国家政策の遂行手段としての戦争を放棄したパリ不戦条約の存在を認めながらも、「ドイツの国家組織を総動員して行なわれている戦争全体を犯罪とはみなしえない」という見解を示した。つまり、「aggressive war（侵略戦争）」を犯罪として裁くのは無理があると断ったわけである。

ところが、ドイツ敗北後に強制収容所の実態が明らかになると、ドイツの「侵略戦争（aggressive war）」とユダヤ人大量虐殺が不可分に結びついていたことが大きな問題となった。その結果、一九四五年五月に戦争犯罪委員会のアメリカ代表となり、連

合国の首席検察官に就任したロバート・J・ジャクソンが、ナチスの侵略戦争は邪悪な戦争であったと判断し、パリ不戦条約を根拠に、「侵略戦争は戦争犯罪である」と主張した。そしてナチスを一網打尽にするために「共同謀議」なる法理論を推進した。

この経緯からもわかるように、連合国戦争犯罪委員会の主目的は、当初はあくまでナチスを裁くためのものであった。現に、コチャービ氏の著書には日本のことはほとんど触れられていない。だが、このような状況の下で日本が降伏したことによって、

「侵略戦争は戦争犯罪である」という新しい綱領が日本にも適用され、日本の戦争を裁く裁判を行うことがポツダム宣言に盛り込まれることになった。いわば日本はナチス・ドイツのとばかりを食ったのである。

繰り返すが、「aggressive war」と

は「先制攻撃を仕掛けた戦争」という客観的な意味にすぎず、話し合いで決着がつかなかった場合の外交手段として戦争は国際法で認められていた。そうした状況下で日清・日露戦争があり、同じ枠組の中で日中戦争も始まったのである。それが戦後、ナチス・ドイツと連動して急に「戦争犯罪」として裁かれることになった。だが、ナチスを告発するのと同様の論理で日本を裁くことは、いかにも困難であった。

是非モノだった「南京大虐殺」

日本にはナチのユダヤ人殺戮のようない、計画的な民族虐殺行為がなかったからである。それどころか、日本の「侵略戦争」の出発点とされた満州国建国にあたっては「民族協和（満州人、漢人、蒙古人、朝鮮人、日本人）」が理念として掲げられていた。太平洋

戦争にしても、アメリカによる石油や鉄の禁輸による自衛のための戦争であったことは疑いようがない。

連合国側としては、日本の戦争指導者を一網打尽に裁くには、日本の戦争を単なる「aggressive war（侵略戦争）」ではなく、ナチスと同等の住民の大量虐殺をもなった「邪悪な戦争」と位置づける必要があった。そこで利用されたのが、日本軍の南京占領時の混乱である。これをナチのホロコーストに匹敵する「南京大虐殺」とすることにより、強引に日本を裁くことにした。

そう考えると、いつさいの疑問が氷解するのである。

「侵略戦争（aggressive war）」は犯罪（crime）である」という固定観点からいったん自由になり、「侵略戦争は悪である」という概念を取り外してみる必要がある。これまでの硬直した歴

史観にとらわれたままでは、いつまでも日中戦争の実態は見えてこないし、「歴史を鑑かたとする」ことなどは到底不可能である。

こうした私の考えと通底するのが、日中戦争について研究されている中国人の工学博士、林思雲氏の視点である。「中国は日本に一方的に侵略されたわけではない。中国側も戦争を望み、積極的に行動した。したがって、この戦争はいわばライバル同士の戦いであった」と主張する林氏と私は、共著の形で『日中戦争——戦争を望ん

だ中国、望まなかった日本』(PHP研究所刊)を上梓した。これまでの意見交換を基礎に、私が全体の構成を考え、それぞれが執筆を分担した。本書の出来ばえは読者の判断をおおぐしかないが、中国人の歴史叙述を「避諱」(ページ参照)という中国人独自の心性から読み解く林氏の記述には、目を開かれる思いがした。以下、その点を含め、林氏とあらためて日中戦争の実像について語り合った。

2 中国人の歴史観にひそむ「避諱」 とは何か

林思雲×北村稔

北村 林さんは南京大学でポリマー(高分子)を研究されていたそうですね。どうして歴史、とくに日中戦争史に興味を持たれるようになったん

ですか。
林 もともと歴史とか人文科学に興味があったんですが、中国の複雑な事情がありまして、いまの中国では

人文科学は人気がない。いろいろ制限がありますから、理工系のほうがいいかな、と思って大学では科学を勉強することにしたんです。
北村 歴史をやると、どうしても共產党の歴史観とぶつかりますからね。持論を全面展開できない。
林 日本に来てみたら、歴史のとなえ方が中国で教わったのと全然違う。それで日中戦争について考えるようになりました。とくに、二〇〇六年の八月に放送されたNHKの「放送スベシャル——日中戦争」ですね、あれを観たら、日中戦争を拡大させたのは日本の主戦派の責任で、中国側はただひたすら侵略されるままだったかのように言われていました。戦争責任はすべて日本にあると日本人が言うのは一見誠実なようでいて、中国人から見ると傲慢な態度だと言わざるを得ません。日本が戦争を拡大

させようと思えば拡大できたし、やめようと思えばやめることもできたというのは事実ではない。中国でも日本と戦う気運は大いに盛り上がっていましたから、日本が戦争したく

がぜんぶ外れて共同租界に落ちた。そのせいで中国人も外国人も大勢死んでいます。だから中国軍の技術はなっていないとよくは言うんです。

林 なるほど(笑)。

北村 あとから台風のせいで爆弾が流れたなどという言い訳が出現していますけど。この爆撃に対して近衛(文相)内閣は「膺懲暴戾支那」と言った。失礼な暴れ者の支那をこらしめてやる、という意味ですね。いまではその言葉だけが切り離されて使われますけど、共同租界に落ちたとはいえ、いきなり爆弾を落とされたんだから、それくらい言いますよ。具体的な背景を考えなければいけない。このときは中国のほうが「aggressive」だったのではないですか。

戦争を望んだのは中国

北村 八月十四日には、上海にいた日本海軍の特別陸戦隊と、居留民の引き揚げを保護するために派遣されていた第三艦隊の旗艦「出雲」を、中国空軍が爆撃します。ところが爆弾

林 満州事変(一九三一年)のあと、南京市民の間で激しい抗日救国運動が起こって、全国の大都市に広がりま

した。蒋介石の「恐日病」を非難して、日本と戦うことを主張する学生が国民党の中央党部に乱入したり、国民党の新聞、「中央日報」の社屋を破壊しようとして軍警察と衝突し、三十人以上の学生が亡くなっています。盧溝橋事件(一九三七年)なんて、当時の日中両軍は一触即発の状況でしたから、どちらが先に発砲したかなんて大した問題ではない。むしろ問題のすりかえのような気がします。どちらが撃つてもおかしくなかった。起こるべくして起こった戦闘です。戦争を誘発するために共産党軍が発砲したという説もありますが、そうであったとしてもおかしくありません。

北村 どっちが「aggressive」だったか、先制攻撃を仕掛けたか、というのは問題じゃない。仕掛けたほうが「侵略国家」になってしまう可能性はあるけど(笑)。

林 盧溝橋事件自体は本来、大した

衝突ではありません。それに先立つ満州事変、上海事件、熱河事変のほ

うがずっと大きな軍事衝突でした。

ただ、そのときはまだ中国側の和平派の力も強かったから、全面戦争まで至らなかった。ところが、主戦派が主導権を握ったために、盧溝橋事件がきっかけで全面戦争に突入することになりました。

戦争の拡大を望んだのは日本ではなく、中国です。

日本は局部戦争では勝てても、国力からして全面戦争には耐えられないから、そこに持ち込めば勝てると中国は考えたのです。

主戦派は、中国は人数でも領土でも資源でも優勢なのだから日本に敗れるはずがないと主張していました。が、もう一つ、戦争を拡大すれば、日本の満州支配を黙認している他の

列強諸国の中国における諸権益が脅

威にさらされるため、列強諸国が日本に対して干渉してくるに違いないという読みがあった。

北村 なるほど。

日本が侵略したって??

林 中国の教科書では「日本は中国を滅亡させようと企んで侵略を行った」ということになっていますが、日本が戦争を起こしたのは、アメリカがイラク戦争を始めた目的とあまり変わりありません。

反日的な国民政府を倒して親日政権を作り、中国大陸における日本に対する脅威を取り除くためでした。それに失敗したから、ズルズルと戦争を続けざるを得なくなった。日本はこんなに長く戦争をするつもりはなかったはずだ。

まして、全面戦争などしたくなかつ

た。

北村 そもそも蒋介石は、一九三〇年代の前半から日本との戦争に備えて軍備を刷新するために、ナチス・ドイツと親密な関係を築いていましたね。これは意外と知られていない事実です。上海から南京一体において日本軍と激突した中国軍の武器はドイツ製、防衛陣地はドイツ式で、作戦を指導したのはドイツから派遣された軍事顧問団でした。ドイツは軍事援助の見返りとして、中国で採れるタングステンがほしかった。タングステンは砲弾の生産や工作機械の刃に欠かせない希少金属です。これがドイツの軍需産業を支え、ヨーロッパにおけるドイツの勢力拡大を可能にしたと言っている。

ただ、ドイツは日本と中国がある程度の和平状態にあることを望んでいました。中国との戦争が激しくな

ると、ソ連に対する日本の軍事行動がおろそかになる。ドイツとソ連は当時最大の敵同士でしたから、日本にソ連を牽制する役割を期待していた。

だから、南京陥落後に中国駐在のドイツ大使、トラウトマンが日中の和平工作にのりだしたりしている。

林 ソ連のほうは日本と中国を戦わせておきたかった。日本の動きを封じるために。

正直すぎて裏が読めない

北村 だからソ連も、日中戦争が始まると中国と相互不可侵条約を結んで、国民政府に対して軍事顧問を派遣して武器を供与しましたね。でも、ソ連は中国の勝利を望んでいたわけではなかった。もともと中国とは満州をめぐる敵対していたわけですから。日本軍を中国国内に釘づけに

しておいてくれさえすればよかった。このへん、すごく利害が錯綜しているんですね。

林 日本もドイツの中国に対する軍事援助はうすうす知っていましたね。

北村 一度、抗議していますからね。だけど、日独伊三国同盟（一九四〇年）

を結んだあとドイツは国民政府への援助を続けていた。違う国の名義にしたりしてね。ヒトラーは「日本には出来るだけ秘密にしておけ」と言っていた。一方で、満州国を承認して軍事顧問を引き上げさせて日本に好意的なところを見せる。四一年に日本の傀儡政権だった汪兆銘政権を承認したことで蒋介石の国民政府と断交して、やっと軍事援助が終わるわけです。

林 一方で、ドイツとソ連は独ソ不可侵条約を結んでいるから、このへんはとても複雑なんですね。

北村 ノモンハン事件（一九三九年）で日本がソ連と衝突している最中に、ヒトラーとスターリンが手を結んだんですからね。それで時の平沼（麒麟一郎）内閣が「欧州情勢は複雑怪奇」だと言って総辞職してしまった（笑）。日本人は正直すぎて裏が読めない。主體的な戦略というのが欠けていたとしか言いようがありません。

林 中国の国内にも、いろいろな勢力がありました。蒋介石の国民政府と共産党軍、「反蒋介石」の地方軍閥、それに親日勢力がいた。日本が国民政府を駆逐すると、日本軍の力を借りて自分たちの野望を果たそうとしました。満州国を樹立した満州人、内蒙古に自治政権を樹立した蒙古人、それに国民政府に追い出された旧北洋政府の官僚たちも日本の力を借りて北洋政府を復活させた。共産党軍は名目上、国民政府軍、つまり国民

革命軍に編入されて八路軍や新四軍に名称が変わったりしましたが、支配地域をめぐって国民政府軍としょっちゅう衝突し、抗争を繰り返していた。

溥儀はうれしかったハズ

北村 だから日本はへたに介入せず、傍観しているだけでもよかったのではないでしょうか。そもそも日本が満州内の権益を手に入れたのって日露戦争の賠償金がわりで、日本にとってはしかたなく帝政ロシアから譲り受けたものです。日本側の計算としては最悪のケースだったんですね。そのために中国国内の複雑な権益争いに巻き込まれてしまった。中国人が借金のカタに帝政ロシアにわたしていた権益を期限付きで又貸ししてもらっただけ、みたいなものです。重荷になるだけだった。だから

「この期限付きの権益を強固なものにしたくて、期限を延ばせと対華二十一条を要求して中国を怒らせてしまった。やがて日本の満鉄（南満洲鉄道株式会社）の経営は、中国側からの経済攻勢によりジリ貧におちいりはじめる。中国側は早くから満鉄の路線に平行する鉄道線を建設しつつあった。それなら満州を独立させてしまえということになり、ちょうど紫禁城を一九四二年に追い出されて鬱々としていた清朝最後の皇帝、溥儀が天津の租界にいた。満州人も国民政府をうらんでいたから、両者の利害は一致したんですね。国民政府軍の兵士が西太后の墓をあばいたりしていますから、それは溥儀も怒り心頭ですよ。」

そこに日本が受け皿を作ってくれたんだから、溥儀はうれしかったと思いますよ。東京裁判では、日本に

強制されて満州国皇帝になったなんて言っていますけどね。

林 アジアで植民地にならなかったのは中国と日本だけです。植民地化されなかったためには軍事力を強化しなければなりません。日本も中国も「富国強兵」をめざし、日本の「脱亜入欧」があり、中国では「洋務運動」が起りました。ともに近代的な軍事国家の道を歩もうとしたという意味で、中国と日本はライバルでした。でも、日本のほうが、近代化と軍国主義化に成功した。日清戦争で負けたのは、戦ったのが実質的に李鴻章の北洋軍だけで、しかも清朝はもう末期にあったせいもありますが、中国の失敗は、「強兵」ということについて、西洋の進んだ武器を輸入し、優秀なエリートである将校を教育するだけで、兵士を育てるという考え方がまったくなかった点にあります。

北村 日本と中国はお互いに西洋の圧迫に対して近代化の道を歩んだ好敵手同士であって、共通の土壌を持っていたという視点は、考えてみれば当然の話ですが、日本にはそういう視点から発言する人はあまりいませんでした。

林 中国ではエリートと農民、都市と農村の格差が激しいのです。これは現代中国でも同じで、いろいろな問題になっているのは日本でもよく知られているとおりです。

日中戦争は、近代国家同士が国をあげて戦う大戦争のはずでしたが、当時の中国にはその体制ができていなかった。というのは、中国の文化的伝統としてエリート以外は「愚民」であるという「愚民論」の考え方があり、農民を寄せ集めた兵士は基本的に「愚民」だったからです。「愚民」とは文字どおり生来愚かな民衆であっ

「富国強兵」の差

て、彼らに教育は必要ではないと考えられていた。生まれながらのエリートである支配者階級の命令のままに動くしかない存在なのです。『論語』にも「民は寄らしむべし、知らしむべからず」とあるように、愚者にはものごとを理解できる能力がないから、智者は彼らを知りなま統制するというのが中国の伝統です。だから兵士を教育するという発想がありませんでした。

北村 農民は「愚民」というわけですね。日本に対する和平派と主戦派の論争もエリート内部の論争だった。

林 そのとおりです。農民には国家を論ずる権利も知識もありませんでした。農民はなぜ日本と戦うのかわからなかったし、そもそも日本がどこにあるのかも知りませんでした。

日本軍はどこかの中国の地方軍閥だろうと思っている者までいた。国民党軍の方誠という将校は、「日本軍の中級以上の士官の戦術レベルは我が軍より一、二段階高い、下級士官の場合は二、三段階高い。兵士にいたっては全く敵に及ばない」と言っています。

当時、共産党軍である八路軍の師団長だった林彪の話によると、戦闘訓練を受けておらず、軍事的常識もなかった中国兵は匍匐前進も知らないで、立ったまま射撃するし、一団となって進むから、敵にとって格好の標的となった。また、のちに中華民国の副総裁となった李宗仁は、日本の飛行機が爆弾を落としても伏せたり隠れようとしたりすることもなく、突っ立ったまま、飛行機に向かって罵声を浴びせる者までいたと言っています。

よく訓練された、しかもちゃんとした教育のある日本の兵士とは比べ物にならない。それが日本軍と中国軍の大きな違いだった。

日本はエリートだけでなく、一般民衆から農民まで分け隔てなく教育がいきたり、全般的に知的水準が高かった。そこが中国と日本の「富国強兵」の差だったと思うのです。

北村 中国は自分たちのほうが文化的に優位にあるというプライドがあったから、外国から武器と技術だけを取り入れればいいと思っていたところがある。だけど、それはエリートだけの文化なのです。

農民を拉致して兵士に

林 中国ではエリートは肉体労働を軽視してきました。「賤しいものは力を勞し、貴いものは心を勞す」という諺があつて、兵士というのは肉体勞

働であるうえに生命の危険があるから、社会的地位がすごく低くて、誰も兵士にならなかつた。だから、国民政府時代に徴兵制度が出現したといつても、都市の住民は金を払えば兵役を逃れられた。その結果、日中戦争は兵士が不足し、国民政府軍は「抓壮丁」の方式で、つまり成人男子の農民を拉致して無理やり兵士にしていました。こうして強制的に連れてこられた兵士は当然、すきを見て逃げようとするから、兵士の逃亡を防ぐことが士官の重要な任務だった。ただ、農民でも金さえあれば賄賂を使つて兵役を免れることができる。そうして徴兵が定数に満たないと、通行人をいきなり拉致して連れていったりするので。縛られたり、ろくに食べ物も与えられないひどい扱い方をされますから、戦地に着く前に大部分が死んでしまった

という悲惨さです。これは中国人だけでなく、アメリカ人も目撃して文章に残しています。

北村 結局、毛沢東の共産党軍が農民を味方につけたわけだけれど、そういう「愚民」ということからすると、中国の農民は政治に無関心だったから、国民政府軍でも、共産党軍でも、日本軍でも、自分たちに害を及ぼさず、生活を保障してくれさえすればどの軍隊でもよかったわけですね。

林 そういう兵士の「質」の差があつたから、日本軍はやすやすと中国の主要な港や都市を占領してしましました。だけど、満州を除けば陸の孤島のような都市を支配してただけで、広大な農村部にはまったく手が廻らなかつた。そして、大部分の都市を占領したことが逆に日本の負担になってしまったのです。中国に侵入した日本軍はせいぜい数十万人。

ところが占領した都市の住民の数は数百万から一千万人にのぼります。日本軍はこの膨大な数の住民たちを飢えさせるわけにはいきません。とはいえ、日本国内だって食糧が不足しているときだから、日本から持つてくることもできない。どうしても「現地調達」するしかなかったのです。日本軍も平和裡に食糧を調達しなかったはずですが、親日政府の樹立をめざす日本軍の行くところすべて無政府状態が出現する。そこで農村から強制的に取り立てるしかなかった。本来、反日でも抗日でもなかった農民たちも、それでやむをえず立ち上がり、日本軍に抵抗するしかなかったのです。

北村 日本軍が農民の反発を買ってしまったために、共産党軍がタナボタ式に農民の支持を得るようになってたんですね。毛沢東は、一九二〇年

代の終わりに反国民党の農村ゲリラ活動を開始したのですが、当初は全然農民に支持されなくて「寂しい」とまで言っているんですよ。そして日中戦争が始まる前には、いったん国民党に農村部を奪われましたから。そこに日本軍が入つていつて農民に反発されたことによつて、共産党が息を吹き返した。毛沢東は戦後になって、共産党が最終的に勝利したのは日本軍のおかげだと、いろんな機会に語っていますよね。

中国人はなぜ嘘をつくのか

林 日本軍の強制的な食糧調達は「搶糧」と呼ばれました。食糧強奪、という意味ですね。日本軍がやって来るのがわかると、村人たちは食糧や家畜を隠し、自分たちも全員山かどこかに逃げてしまう。ところが日本軍が食糧を発見して残らず運び

去つてしまうと、村人たちは絶望し、餓死しないためにしかたなく強盗と化して他の村を襲い、食糧を奪うことになるのです。するとまた被害を受けた村の人間が別の村へ行つて食糧を強奪するといふ悪循環に陥る。こうして多くの村がひどい目にあふことになって、日本軍に対するうらみが連鎖的に広がっていき、結果的に抗日武装勢力の共産党を支持する農民がふえていきました。共産党が急速に力を伸ばした原因はこれなんです。

北村 都市の住人を食べさせるために農村から食糧を徴収し、その結果、農村同士で食糧の奪い合いがあつたというのは、林さんの文章を読むまで知らなかつた。

林 日本軍は中国の一般民衆を直接殺したということはあまりないと思いますが、中国の秩序を混乱させて

しまった。

北村 戦争での戦略方針は中国のほうに巧みでしたね。ドイツともソ連とも手を結ぶし、最後はアメリカを味方につけた。防衛省の資料などを読むと、実は日本はもう戦争を続けたくなくて、国民政府と何度も和平工作をしている。ところが、蒋介石はアメリカの出兵を見ながら天秤にかけているので、なかなか交渉が進まない。アメリカが味方につくと見きわめた時点で交渉を決裂させます。中国人の考え方の基本は知略と謀略ですね。戦わずして勝つのがいちばんだと知っている。

日本人は中国の孫子の兵法が好きだけれど、「敵を知り己を知れば百戦危うからず」とか言って、初めから戦うことが前提になっている。日本人はサムライだから戦わなければならない。

日本人は『論語』も好きだけれど、林さんが言っていた「避諱」という言葉ですね、これについて、近現代の日本人はあまり深く考えたことがない。「仁・義・礼・知・信・忠・孝」などはよく知られていますが、同じような徳目の一つである「避諱」こそが、中国人の歴史認識に対する伝統的な心性だという林さんのお説には、なるほどと感心しております。

儒学でなく儒教

林 日本では『論語』は「儒学」になっていますね。学問としてとらえている。でも、中国人にとっては「儒教」なんです。一時は共産党の教義に反するからと言って批判されましたが、中国人にとっては文化とか、習慣であって、教えというよりもっと体にしみついたものですね、孔子は。日本では正直であることがいちばんと

されますが、中国では正直であることはあまり重要じゃない。大切なのは「面子」ですね。「避諱」というのは隠すとか避けるとかという意味ですが、国家や家族のために不利なことは、事実を曲げてでも隠さねばならない、それが正しい。身内の体面を汚すことはあってはならないのです。

北村 日本語の「忌避」と似ているけれど、もっと積極的な意味がある。日本では、「正直」と「面子」はあまり対立しない。正直に言えば面子はつぶさないようにするから、ということもありますしね。

林 中国人にとって「歴史」というのは事実の積み重ねでなくともいいのです。それどころか国家にとって都合の悪いこと、不名誉なことはいっさい明らかにしてはいけない。それが国を安定させる、それで世の中が治まるという考え方です。そのため

に積極的に嘘をつくことは倫理的に正しい行為なのです。中国人がものごとを大げさに言ったり、平気で嘘をついたりするのを、ただ相手をだますためののだと考えるのは大きな間違いですね。

中国人が嘘をつくのは自分のためというより、家族や国家のためという場合が多い。これは中国人にとって動かしがたい伝統的な心性であって、それを知らないで中国人の歴史認識は理解できません。

北村 『論語』にもありますね。自分の父親が羊を盗んだことを告発した人間を、子は親の「不名誉」を隠さねばならないと孔子が論ず話(第十三子路篇)。「避諱」という考え方を持っていると、中国人の歴史認識がすべて納得できます。その表裏の関係として、いったん安定を破壊した者に対しては「避諱」の心性が一八〇度

引っくり返って徹底的に攻撃し始め、虚言を弄してでも相手を貶める。

林 そうです、相手をやっつけるためには嘘をついてもいい。天安門事件のときも、北京の市民がアメリカのテレビ局に三万人が殺されたと言った。私もそのとき天安門の近くにいましたが、そんなに死んでいない。とくに学生は。一般市民はかなり殺されていますが。

北村 三〇〇人くらい死んだんじゃないかな。学生には党幹部の子弟がいっぱいいるし、エリートだから撃つとまずいわけですよ。しかし学生たちから見れば、民主化運動を弾圧した共産党は「敵」だから倒すためにはどんなに嘘をついてもいい。あのとき、同僚の勤務していた京都市内の大学にもファクスが送られてきてね、送り主は天安門広場にいた医学部の学生で、彼らが組織した医療

班が、広場から引き上げようとしているのに、軍隊が水平射撃で撃ってきたとか書いてある。学生が言うんだから本当だと思いましたが、ところがどうも嘘なんですね。共産党憎しの虚言なんですね。

林 共産党も嘘をつきますね。毛沢東のせいで七千万人が餓死したって言うてる。最初は何百万人と言っていたのが、一千万人、三千万人になっていって、最後は七千万人になった(笑)。

愛国虚言の伝説

北村 ユン・チアンの書いた『マオ』もそうですね。文化大革命によって家族を破壊させられたとなると、それまで神のように崇めていた毛沢東を一転して攻撃する。でも、批判にかなり無理のある部分がある。創作も混じっていると思います。まして

や仇敵である日本軍の「南京大虐殺」となると、いくらでもエスカレートする。上海と南京の攻防戦で中国軍に三十万人の死傷者が出たといわれていますけど、その数字がいつのまにか南京で虐殺された人数として独り歩きし始めるんです。

林 一般の中国人は、本当はそんなに殺されたとは思っていません。だけど、被害を膨大に主張することは愛国心の表れとされるんです。「愛国虚言」といって、国を愛するがゆえに、国に仇をなした者を、虚言を弄して攻撃する。天安門で三万人が殺された発言するのも同じです。だから、そんなの嘘だと思っても否定しちやいけな。そんなことをしたら売国奴だと言われるから。

北村 徹底した儒教国家である韓国にも、「避諱」精神があるのに気づいたことがあります。ES細胞を捏造

したといつてソウル大学を追われた黄禹錫教授の事件がありました。黄教授を支持する団体が、捏造を告発した調査委員長を名誉棄損で訴えたと宣言した。国家の名誉を守るためには、ノーベル賞候補でもあった偉大な科学者の誤りは隠すべきだと言うのです。これもまさに「避諱」の精神ですね。

「真実」は重要でない

林 中国で「科学」が誕生しなかったのも、それが理由だと思っています。「科学」の目的はただ一つ、真理と真実の追求です。でも、中国人にとって「真実」は決して重要ではないのですから。歴史学者なら、歴史の真相を追求するのが第一の研究目的のはずですが、共産党に限らず、中国の歴史学者にとって研究の第一の目的は国家の擁護なのです。

アイリス・チャンの『ザ・レイプ・オブ・南京』を日本人は歴史の捏造だと言って非難しますが、彼女がこの本を書いたのは歴史の真相を研究するためではなく、愛国心から歴史を「編集」するのが目的だったのです。西洋的な科学的検証に耐えられないのは初めからわかっている。ですが、アイリス・チャンは中国のために真実を避諱したのですから、中国人にとって、その虚言は批判するどころか、称賛されるべきであって、現に中国では真の愛国者として大変な尊敬を集めています。

つまり、中国における避諱の伝統と科学とは相反するもののなのです。避諱による「愛国虚言」は日本人にはとうてい受け入れられないものでしょう。

同じように、中国人にとっては日本が主張する「科学的検証」を受け入

れることはできないのです。

北村 そう考えると、中国人のことがわかってくる。「南京虐殺」についても、殺された人数を多く言えば言うほど尊敬すべき愛国者なわけです。だから、日中で歴史を共同研究しようといつてもちよつと無理なんです。こちらが理詰めで話を進めても、自国に都合が悪いとなったらいい認めない。

私は従来は国民党と共産党の関係を研究していたのですが、中国の共産党史研究者にも、両党の争いの真実がわかっている人はいっぱいいるんです。非公式な場で話していると、「そうそう、そのとおり」とか賛成してくれるんだけど、ところがいったん会議になると人が変わったようにピンと背筋を伸ばして全然違うことを言う。「おいおい、何言ってるんだ、ゆうべ言ったことと違うじゃない

か」って最初はびっくりした。

日中戦争史研究についても同じことが言えるわけで、なぜ本当のことを言わないんだ、ウソつき、とか言ったりしたら最悪なことになる。相手の立場をわかってあげて、こちらが損しないようにして、じゃどうするかを考えなければいけない。

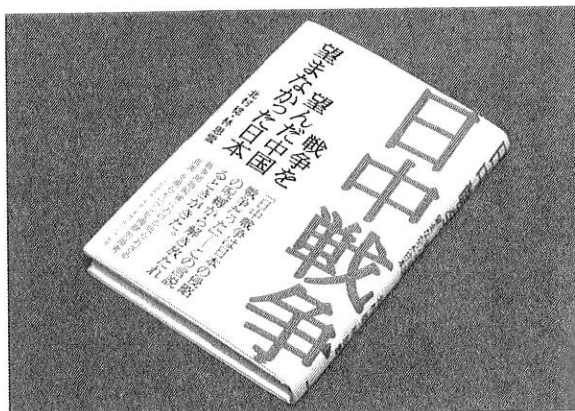
「千古罪人」

林 もう一つ、中国人の「罪」に対する考え方があります。西洋人は、人が罪を犯してもそれは償えろと考えます。たとえば裁判を受け、刑に服して刑期を終えれば罪を償ったということになる。さらに、死者の罪は問わないことになっています。日本人も同じように考えますね。ところが中国人の伝統的な考え方では、罪は死んでも償えないものです。中国には「千古罪人」という言葉がありま

す。人間の罪は千年たっても洗い清めることはできない、という意味です。だから、中国人にとって、日本の戦犯は永遠に戦犯なのです。死んでしまったからといって戦犯として起訴されることを免れたり、一度戦犯とされた人間が政界に復帰したり、まして勲章を授けられたりすることは断じて許されません。同じように、日本が犯した「戦争犯罪」は永遠に償っていかねばならないと中国人は考えます。

よく「いつまで中国に謝ればいいんだ」と言う日本人がいますが、中国人にしてみれば、日本は永遠に謝り続ける必要があるのです。

北村 いまも東京裁判の枠組のなかでしか考えられない人が日本には多いんですね。その点、連合国側の作戦はみごとに当たった(笑)。それに、東京裁判というのは中国共産党に



北村・林両氏の共著本

北村 まったく噛み合わないから論争自体が不毛な感じがしますね。と

林 それでも、戦争責任とか、南京大虐殺の真偽とかについての中国と日本の論争は、それぞれの理念と道徳の価値観がまったく異なっている、見解が一致することはまずないでしょうね。

北村 国民党は「日本のファシズム」を抗日戦争によって打倒したと主張しているわけだから、日本のファシズムの盟友で「歴史の罪人」となったナチス・ドイツと手を組んでいたことは絶対には触れてはいけない。国民党にとっては、うしろめたい過去なんです。

はいえ、日中戦争が中国本土で行なわれたこと、中国が戦場となったことはたしかですから、それについての中国人の怒りは理解しなければいけない。

そうして我々としては、東京裁判の枠組から思考を解き放って、もう一度、歴史資料を正確に読み解いていかなければならない。中国人の「愛国虚言」を念頭におきながらね。

きたむら みのも

一九四八年、京都府生まれ。京都大学文学部史学科卒業。同大学院博士課程中途退学。三重大学助教授を経て立命館大学文学部教授。法学博士。専門は中国近代史。主な著書に『第一次国共合作の研究（岩波書店）』、『南京事件』の探求（文春新書）、『中国は社会主義で幸せになったのか』（PHP新書）など。

リン・スーユン（ペンネーム）

一九六三年、中国南京生まれ。八五年南京大学卒業。九二年留学のため来日。九六年九州大学で工学博士号を取得し日本の企業に就職。共著に『中国人と日本人——ホンネの対話』、『続・中国人と日本人——ホンネの対話』（以上、日中出版）がある。個人ウェブサイト「林恩雲之文」（中国語）<http://slyun.xdabcn.com>

とつても実に都合のいいものだったから、「侵略戦争」という考え方をうまく利用したのだと思う。だから「侵略」とか「戦争犯罪」という枠をいったん外して考えなければいけない。そういうと日本の侵略を認めないのかと言われますけれど。

日本軍に救われた

林 実際は、共産党にも国民党にもいろいろ都合の悪いところがあるけれど、そこらばうまく隠してしまっただけで、共産党と国民党の間ではお互いの行為について「避諱」する必要がないから、それぞれの側の文献を見ると、歯に衣着せぬ事柄が書いてあります。

国民党側は共産党がこんな悪いことをしたと書き、共産党側は国民党の行動を批判しています。それを両方読むことによって真相が見えてく

ることがある。だから、共産党の文献、国民党の文献、両方を調べなければいけない。

北村 それについては一度、ひどい目にあったことがあります。日本が降伏したあと、共産党の林彪率いる部隊が満州に入り、国民党軍と戦って勝つんですけど、四五年の九月段階では国民政府とソ連の間で友好同盟条約（四五年八月十四日締結）があった、スターリンは蒋介石を中国の代表と認めていた。共産党は国民党の下位に置かれていたから、その状況下で林彪が勝手に動いたというのはまずいんですね。だから、中国の軍事科学院編の立派な歴史書にも、満州にいた林彪の部隊のことを満州独立軍とか満州自治軍とか呼び、満州人が自発的に組織した部隊であるかのように書いてあるんです。これについては欧米の研究書にもあたって

みたのですが、はつきりしない。そういうわけで、満州人のなかに蒋介石のやり方に反発する独立勢力があったんだらうと論文に書いたたら、全然違っていた。台湾側から出版された研究書を読んだら、林彪が名前を伏せて入ったのであり、実際には共産党軍だった。

毛沢東が重慶会談で蒋介石と話し合っている一方で、早く満州を取ったものが勝ちだというわけで、共産党も国民党に対抗して軍隊を送っているんですね。しかし歴史書では、反蒋介石の勢力が満州にあって、それがやがて林彪と結びついたんだっていうことになっている。実際の経緯をきれいに隠しているんです。

林 中国の作家、劉震雲は小説『温故一九四二』のなかで、日本人を「大量殺戮を犯した侵略者」としながらも、大飢饉による三百万人もの餓死